

【特集①】

子どもの育ちを 永く支援すること

内海新祐*

本稿では、社会的養護を念頭に、長期にわたる支援の経過をどう評価するか、また長期的支援に支援者はいかに臨むかなど、「子どもの育ちを永く支援すること」にまつわる諸問題について考察する。まず、長期的支援においては経過の好転・暗転が交互に入り混じるので、支援に対する評価が容易でないことを示す。次に、評価は容易ではないとしても、その時々可能な支援を尽くし、そのサポートを引き継いでいくことには大きな意味があることを、レジリエンスの視点から確認する。最後に、子どもを長期に支援することが支援者自身にもたらすものについて筆者の経験を基に考え、支援という営為そのものについても考察する。

キーワード：社会的養護，長期的支援，支援の引き継ぎ

1. はじめに

社会的養護は家庭で暮らせなくなった事情を持つ子どもが生活する場であるが、そのような「事情」の背景を想像すれば察せられる通り、子どもたちは逆境的環境を経験してきている。その経験が子どもたちの心身や社会生活におよぼす影響は広範かつ深甚で、ここからの回復と成長には多大な時間を要する。また、家庭の養育基盤は脆弱かつ不安定で、帰れる状態になる

のは大抵容易ではない。このため、支援はしばしば長期にわたる。特に児童養護施設は対応年齢が幼児から高校生（さらに超過の場合もある）までと幅広く、社会への「出口」になることも多いので、在所期間のみならず、施設を退所してから関わりが続く例がある。しかし、「支援が永くなること」自体が考察の対象になることはあまり多くないように思われる。そこで、本稿では、「子どもの育ちを永く支援すること」にまつわる諸問題について考察する。なお、ここで、「永く」がどの程度の期間以上を指すの

* 旭児童ホーム

かは、特に決まっていない。あくまで理念としての「永く」であって、あえていうなら、区切りや終了を意識しない、というほどの意味で使っている。

2. 社会的養護において支援を評価することの難しさ

(1) 好転と暗転の入れ替わり

ここではまず、支援が長期にわたる場合、その支援をどう評価するかを考えることから始める。仕事としての支援には、評価という作業が要請される。つまり、自分たちの行った支援が何をもたらしたのかに関する考察である。長期であろうと短期であろうと、この点に変わりはない。だが、長期の支援の場合、短期にはない特有の難しさがある。このことを増沢ら(2006)の研究を素材として見ていく。

この研究は、児童福祉領域の専門的研修・研究機関である「子どもの虹情報研修センター」が開催する研修に際して集められた事例を分析したものである。研修の受講生は事前課題として、自分が所属する機関で関わっている(いた)児童虐待事例から、「援助が困難で困っているケース」「困難事例」か「比較的うまくいったケース」「うまくいった事例」かを一例選択し、その事例概要を提出する。この「事例の概要」を分析対象として、「困難事例」と「うまくいった事例」を様々な角度から比較検討するのがこの研究の本来的な目的なのだが、ここで興味深いのは、「うまくいった事例」をめぐる以下の考察である。

これまで「困難事例」と「うまくいった事例」を対比して考察を行ってきたが、両者の事例を読み込むと、「うまくいった事例」として提出されても、実際は多くの困難を伴っている

場合もある。両者は重なり合っており言葉から受ける印象ほど対極概念ではないことが分かった。紙一重とってよい場合も多い。(中略)「うまくいった事例」とは「困難のなかった事例」とも「問題の全てが解決してよかった」という事例であるともいえず、むしろその逆で、非常に困難で苦しんだ時期のある事例、あるいは、本質的な困難や重さを抱え込んできた事例だということである。(中略)その困難な時期とのコントラスト、永続的な困難や重篤さと現在の状況とのコントラストにおいて、「比較的うまくいった」と感受されていると思われる(「あの大変さに比べれば/このケースが本来抱えている大変さに比べれば、今後もしろいろあるかもしれないが、まあ、まずはよくやったといえる」など)。(前掲書、7-8頁)

この研究において分析対象となった「うまくいった事例」とは、すべて支援期間が5年以上のものである。「事例の概要」からは、この歳月の中で相当な紆余曲折があったことがうかがわれる。また「本質的な困難や重さを抱え込んできた事例」であろうことに鑑みれば、今後も山あり谷ありの経過が待っていることが想像される。ゆえに、上記の引用箇所が続いて「提出を求められる時期が前後していれば、『困難事例』として提出された可能性も十分考えられる」(同、8頁)と考察されているのは、まさにその通りであろう。

以上、この研究の紹介を通して筆者が述べたかったのは、長期的支援においては、同じ事例でも「困難事例」と「うまくいった事例」が時期によって評価が入れ替わる可能性を常に孕んでおり、それゆえ支援を全体としてどう評価するかも難しくなるということである。例えば「うまくいった事例」とされた中に次のような事例がある。「独特の性格と対人傾向があり、

入所した小学時代から高校卒業まで、他の入所児童と交わることがほとんどなく、担当職員にも燃え尽き症候群が見られた。不登校、拒食・偏食、自傷行為など多彩な状態がずっと続いた。この事例は、希望の進学を果たし、家庭引取りという肯定的な要素を含んだ経過をたどったが、自傷行為などは続き、職員としては、この子の将来に対する不安や、もっと何かできなかったかという悔いもある」(同、7-8頁)。この事例において、家庭復帰後に家族との折り合いがうまくいかなくなり、進学先でも不適応となって、自傷や過量服薬が昂じて救急搬送される事態が続くなどということは、残念ながらありうる話である。しかし、そうなったとして、これを、その時点で切り取って「支援の失敗」というべきだろうか？

このあたりの機微は、^{あざな}「禍福は糾える縄の如し」であり、「人間万事塞翁が馬」的であるともいえるだろう。「外来」形式で行われるカウンセリングや心理療法であれば、来談時に持ち込まれた「問題」が軽減したり、新たな認識が得られたりしてより生きやすくなれば、とりあえずは「成功事例」と認識されるだろうし、それが果たされなければ「失敗事例」という評価に、一応はなるだろう。視界は基本的には治療援助の期間にある。だが、社会的養護は本来的に、その子の「育ち」の経過全体を問題とし、少し大袈裟に言えば、人生を視界に入れようとしている。人生の成功や失敗（そのようなものがあるとする）が容易に評定できないように、社会的養護における支援の成功や失敗も容易には評定できないと考えられる。

(2) 長期事例に対するバイアス

社会的養護における支援の成功や失敗は容易には評定できない。とはいえ、社会的養護の場にいた子どもの長期的な経過が「好転・暗転ど

ちらもありうる」とだけ言って済ませていられるかという、そうもいかないだろう。社会的養護に携わる者ならば、逆境的环境下に置かれていた子どもが社会的養護を経ることによってより良い生活を築けるようになったのか、また、彼らの子どもたちが、かつて彼ら自身が子どもだったころより豊かな子ども時代を送れるようになっているかは関心事となるはずである。社会的にも学問的にも、支援のその後とそこに関与した要因を検証する試みは必要である。

実際はどうか。私たち社会的養護に携わる者は、あらまほしき経過の役に立てているのだろうか？ 残念ながら、日本においてこれを直接的に示す研究やデータは、筆者の知る限り、ない。施設や里親を措置解除になったその後の生活実態を把握しようとした調査はいくつかあるが(永野、2015、厚生労働省、2021、認定NPO法人ブリッジフォースマイル、2024)、これらはあくまで調査時点における「実態把握」であって、社会的養護に関わる前・後での子どもの回復・成長(もしくは悪化)や、そこに関与した要因を示すものではない。また、実態把握といってもせいぜい退所後5年程度以内のものであり、彼らの次世代の状況までをとらえたものではない。

調査研究のデータがないとなれば、「自分たちの支援がその後どのような経過をたどっていったのかを検証する営為」は自験例が中心となる。しかし、ここには一定のバイアスがかかることを意識しておく必要がある。筆者も退所後10年以上を経てなお関わりのある「子ども」(といっても20代後半や30代になっているわけだが)が複数名いるが、それはやはり全体数の中では例外に属する。そのような年数を経て「施設に顔を出してくれる」、あるいは「施設に関わらざるを得ない」例というのは、よほど経過が好ましいか、もしくは今なお明らかな困難が

続いているかのどちらかである。退所後に元いた施設とのつながりは「3年以内に3割が途絶えていた」（永野，2015），施設・里親からの措置解除後直近1年間の交流状況が「1回もないが31.1%」（厚生労働省，2021）というのが良くも悪くも一般的なのだとすれば，長期のつながりのあるケースというのは，基本的に，驚くほど良い経過を示すものか，あるいはその逆かのどちらかになると考えられる。

いずれにせよ，長期にわたる事例を経験した支援者は，それがあくまで全体の一部であるという自覚を意識的に持つ必要がある。そうでないと，良い経過をたどり，施設や自分に対して肯定的な評価をしてくれる元「子ども」の存在をいいことに，自身の支援哲学や方法に対して，自分に都合の良い解釈しかできなくなってくるおそれがある。そのようなケースがあることが励みとなり，支援意欲が保たれることを否定はしない。だが，それを盾に，自身の為した現実を脚色なく見つめる眼が曇ることは，ありうる。支援というものが十全で完璧であることなどあるはずがない。ゆえに，自らの支援を検証する機会を作り，目の前には現れない元「子ども」に背負わせたかもしれない諸側面を検討する必要があるだろう。

これとは逆に，時間も労力も気持ちも投入したのに，それが実を結んでいるとは思えないケースの存在が，支援という営み全般に対する無力感や虚無感を広げる場合もある。長く社会的養護に携わっていれば，そのような感覚とまったくの無縁でいることは難しい。しかし，だからこそ，支援への意欲を枯渇させない努力の一環として，必ずしもそういうケースばかりではないという事実を目を向ける必要があると思われる。

3. 長期的支援とレジリエンス

(1) 社会的養護における「支援の断絶」の現状

ところで，社会的養護において「子どもの育ちを永く支援する」といった場合，大きく分けて二通り考えられる。一つは，特定の支援者，あるいは特定の機関が長期的に関わること。もう一つは，支援者や機関は変わるが，支援は連綿と続いていくこと。現在，社会的養護は「家庭養育優先原則に基づき，家庭での養育が困難又は適当でない場合は，養育者の家庭にこどもを迎え入れて養育を行う里親やファミリーホーム（家庭養護）を優先する」ことを基本理念の一つに謳っている（こども家庭庁，2025）。これに沿ってイメージするならば，まず浮かぶのは前者であろう。本稿でも暗にそのようなイメージを念頭にここまで述べてきた。しかし，実際は，後者が圧倒的に多い。令和5（2023）年度において，要保護児童全体に対して里親・ファミリーホームの占める割合は約2割である。以前より増加しているとはいえ，比率として少ない状態は続いている。また，里親やファミリーホームならば支援は永続的かといえ，必ずしもそうではない。里親の平均委託期間は4.5年で，現時点では児童養護施設の5.2年より短い（こども家庭庁，2025）。他の里親や施設などへの委託先の変更も例外的事態とはいえない。

施設養育となると，乳児院が正式に関われるのは長くても3～4年である。児童養護施設においても，児童自立支援施設や児童心理治療施設などへの措置変更はあるし，またその逆もある。同じ施設で10年以上暮らす場合ももちろんあるが，その実，職員の退職や異動，生活単位の再編成等で主たる養育者との別れを数年ごとに経験する子どもは稀ならずいる。むしろ，どんなにパーマネンシー保障を謳い，家庭的養育を標榜している施設でも，子どもにそのよう

な経験をさせたことがない施設は皆無なのではないだろうか。先に、社会的養護は本来的に、子どもの「育ち」全体を問題にし、人生を視界に入れようとする¹と述べた。確かにそうなのだが、以上のように、社会的養護における育ちの環境は総じて断絶の連続と言わざるを得ず、「育ちを永く支援する」といっても、おおよそ不変のメンバーがそのまま年を重ねていく「家庭」に擬したものにはなっていない。もちろん、社会的養護において支援期間が短いことは、家族状況の好転や子どもの状態像の改善など、肯定的に評価できる場合もあるので、それ自体が問題なわけではない。問題は、本来継続的な支援が必要なケースにおいて、しなくてもよいはずの別れや喪失体験を、子どもには与^{あずか}り知らぬ事情でさせてしまうことである。だが、現実にはそれがスタンダードというほかない。

(2)「支援の断絶」の中で必要となる「つなぐ」視点

上述のような「支援の断絶」が続く中では、努力の方向性は二つ考えられるだろう。一つは、従事者の離職や子どもの環境変化がなるべくなくて済むような組織・体制のマネジメント。もう一つは、ある程度の断絶や環境変化は前提とした上での、それを致命的なものとしな²いための「つなぐ」マネジメント。むろんどちらも大事だが、結婚や出産、病気や介護など、従事者側からすればやはりやむを得ぬ事情による離職はあるし（それに、社会的養護に理解と関心のある市民がその分だけ街中に存在してくれば、それはそれで子どもが育つ社会環境としては意味のあることと言えるかもしれない）、環境や養育者との相性の問題が皆無になることもおおよそ考えにくい。そうなると、個々の支援者や支援機関がそれぞれの場所、それぞれの時期で努めた「点」としての「良き支援」をいかに途切れさ

せないか、次の支援者につないでいくかが、より注力すべき現実的課題と考えられる。

先にも述べたように、本邦において社会的養護の支援効果とその要因を長期的に追った研究は（筆者の知るところでは）ないが、アメリカにおいて、逆境的环境下に出生した子どもの経過とそこに関与した要因を30年以上にわたって調べたスルーフら（2022）の研究は、「永く支援すること」とレジリエンスの発現の関連を考える上で示唆に富んでいる。これによれば、「発達早期に肯定的な養育を受け、早期のコンピテンスの来歴があると、非支持的な来歴のある子どもたちよりもストレスに直面して問題行動を起こす可能性は有意に低くなる」のは確かだとしても、「レジリエンス」と呼ばれるものを促進するのはそのような発達早期のサポートだけではないという。「同様に重要なのは、後に起こるストレスとサポートの変化」であり、実際、「子どもが困難な時期の後に改善を見せるとき、サポートの増加またはストレスの減少、あるいはその両方がしばしば見られる」のだという。そして、「逆境を克服する人々は、後に利用可能な肯定的基盤またはバランスを保つためのサポートがあったために、そうできるのである」として、「レジリエンスは個人の特性ではなく、発達システムの特徴なのである」との見解を示している。つまり、それがどの時期であれ、またどのような場であれ、今、子どもと関わりを持っている人や機関が、目の前にいる子どもへのサポートを増やし、ストレスを低減させる積み重ねは、現在の良き生活状況の助けとなる意味でも、また、後に利用可能な肯定的基盤となってやがて子どものレジリエンスに資する意味でも、意義があるということである。

ここで、この「サポートの増加またはストレスの減少、あるいはその両方」がより生じやすくなるための有効な方策の一つに、支援者間、

あるいは支援機関同士の丁寧な「つなぎ」があると考えられる。たとえば、乳児院における「育ちの振り返り」(村上, 2024) もその一つである。これは、乳児院から里親や児童養護施設への措置変更に際して、子どもの動画記録を観ながら新旧の養育者が語り合う引き継ぎ的なカンファレンスである。乳児院側にとって、これに向けて検討・準備することは、施設内での職種を超えた語り合いを生み、子ども理解の深化や引き継ぐべきポイントの洗練化等の意義があるという。一方、次の養育を担う側にとっても、(映像記録の雄弁さや引き継ぎ内容の重要性はもちろんだが) 発達早期に心身を「この子」に注いでくれた存在があること、またこの引き継ぎに向けて多大な労力が投入されていることを目の当たりにすることが、自分たちが行う養育への意欲や責任意識などの準備性を高めることになると考えられる。

乳児院から児童養護施設などへの措置変更は分かりやすい例であるが、社会的養護はその定義からして、常に「どこかからここへ、ここからどこかへ」の「養育の引き継ぎ」を原理的に内包するので、どこからの引き継ぎでも、あるいはどこへ向けての引き継ぎでも、本質は変わらない。施設内で引き継ぎが生じる場合でも同様である。養育者や養育の場が変わることは、子どもにとっては危機的事態である。危機的事態に手厚く関わることは、アタッチメントの形成や修復、さらにはトラウマケアの観点からも重要といえるだろう(内海, 2023)。

4. 長期的支援が支援者にもたらすもの

以上、「子どもの育ちを永く支援する」ことについて、ある程度の断絶や環境変化は前提とした上で、しかしそれを致命的なものとしなかったための「つなぎ」マネジメントについて述べた。現在の社会的養護においてはそれが現実的だか

らである。しかし、一人の支援者が、あるいは一つの支援機関が、永く子どもの育ちを見続けるのも、やはり社会的養護に従事する者の醍醐味といえる。

先述のように、そこには様々な例がありうる。その中で、「あれほどの労力をかけたのに、結局こうになってしまうのか(生活保護で暮らすとか、犯罪者として刑務所に行くことになるとか、次世代もまた社会的養護が必要になるなど)」と思ってしまう例が一定程度存在するのはおよそ避けられないことである。しかしまた、「あれほどの不適応を示していたのに、こんなにもちゃんと暮らしていけるのか(仕事が続いて家まで買ったり、次世代を大事に育てていたりなど)」と驚いてしまう例に出会えることもある。そう多くはないとしても、そのようなケースはやはり宝といえるであろう。

もちろん、どちらの例にしても、さらなる変転の可能性を常に孕んではいる。生活保護を抜け出した後、仕事が見つかって生き生きとした顔を見せてくれることもあれば、結婚して家庭を持ったのに離婚し、精神的にも不調に陥った様子が耳に入る場合もある。しかしどちらにせよ、それとてまだ「結果」ではなく「プロセス」である。実際、そうした山と谷が、数年後にまた入れ替わったいた、ということはある。あるいはまた、大きな変化やはかばかしい改善はなく、しかし施設と関わりは持ち続ける場合もある。

以下は筆者においては、という一例ではあるが、そういう変転や不変を見聞きし、また時々顔を合わせるうちに、次第に「支援する」という語感がそぐわなくなってくる場合がある。10年、20年と従事するうちに子どもは子どもでなくなり、大人になっている。かつての「幼児さん」も中年となり、ピリピリした気持ちで「アセスメント」やら「支援計画」やらを模索

していたころにはまったく想像できなかった姿を目の当たりにする。また、そのくらいの年月の間には、支援者も当然年を取る。自身の子育てや介護など、ライフサイクルやライフイベントがあり、人生上の心配事や苦難もある。「年を取るのも、人生に苦勞するのもお互い様」の感覚が増し、「専門家」としての見解などたかが知れていることや、可能性の測りがたさと時間の妙味を思い知る。そして、そんなに焦って事態を変えようとせずとも、どうにもならない場合も、どうにかなる場合もあるのだから、ゆっくり子どもの育つのを眺めていてもいいかもしれない、といった気持ちも生じてくる。

人によって違いや幅はあるだろうが、こうした支援者側の認識や気の持ちようの変化も、「子どもの育ちを永く支援する」ことに付随する、無視できない現象といえるだろう。ここから翻って思うのは、そもそも支援というのは、ある一定の目的に向けて個人や環境の変化を促す側面もちろんあるが、そういった将来への計画性とは別に、苦痛の微減やくつろぎの微増など、その時々状況を少しでも良いものにしようと「現在に奉仕する」(白石, 2025) という側面もあるだろうということである。それが未来に対してどれだけの力を持つかはともかく、それ自体が持つ価値に支援者は開かれていた方が良くと筆者は考えている。「子どもの育ちを永く支援すること」は初めから企図されていたわけではなく、そのような「現在の集積」によって「結果としてそうなる」からである。

▶文献

- こども家庭庁 (2025). 資料集「社会的養育の推進に向けて」https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487fbc16/69eff642/20250414_policies_shakaiteki-yougo_130.pdf (閲覧日: 2025.4.23).
- 厚生労働省 (2021). 児童養護施設等への入所措置や里親委託等が解除された者の実態把握に関する全国調査【報告書】<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000863975.pdf> (閲覧日: 2025.4.23).
- 増沢 高, 内海新祐, 石倉陽子, 大川浩明, 佐々木宏二 (2006). 児童養護施設における困難事例の分析 子どもの虹情報研修センター (平成 17 年度研究報告書), 7-8.
- 村上葉月 (2024). 社会的養護における切れ目のない支援とはなにか——児童福祉分野の心理臨床⑩ 養育者から養育者へ思いをつなぐ——乳児院における育ちの振り返り 日本心理臨床学会第 43 回大会自主シンポジウム発表資料 (未公開).
- 永野 咲 (2015). 施設退所後の生活実態を捉える 世界の児童と母性, 79, 47-51.
- 認定 NPO 法人ブリッジフォースマイル (2024). 全国児童養護施設 退所者トラッキング調査結果概要 https://www.b4s.jp/wp-content/uploads/2024/11/B4STracking2024_Summary.pdf (閲覧日: 2025.4.23).
- 白石正明 (2025). ケアと編集. 岩波新書, 89.
- スルーフ, L. A., イーグランド, B., カールソン, E. A. & コリンズ, W. A. (数井みゆき・工藤晋平 (監訳)) (2022). 人間の発達とアタッチメント——逆境的環境における出生から成人までの 30 年にわたるミネソタ長期研究—— 誠信書房, 261-262.
- 内海新祐 (2023). 「ケア」を謳わないケア——児童養護施設・心理職の視点から—— 言視舎, 78.

Supporting children's growth over the long term

UTSUMI, Shinsuke

Asahi jidou home

Journal of Child Welfare and Psychology 2025, Vol.2, 2-9

Abstract:

This paper explores key issues associated with providing sustained support for children's development, with particular reference to the field of social care. It examines how the trajectory of long-term support can be evaluated and how support providers should engage with such extended interventions. First, it is argued that the alternating patterns of progress and setbacks characteristic of long-term support make its evaluation inherently complex. Second, while evaluation remains challenging, this paper emphasizes the significance of delivering the best possible support at each stage and ensuring the continuity of such efforts over time, in terms of resilience. Finally, based on the author's personal experiences, the paper reflects on the impact that long-term engagement with children can have on support providers themselves, and considers the broader implications for the practice of caregiving.

Key words: social care, long-term support, transition of support